養生嚢　下

鶚軒文庫
第六架
第一段
第八行
壹部二冊

V 11
1930

VII
1930

小児養生傳

嬰児うまれ出て初声をださぬまへに急にやはらか
なる絹を指にまとひ児の口中にふくミある悪血
穢露を拭ひ去べし。もしとらざれバ啼声につきて
悪血腹中に入て百病となるなり。此法を玉銜と
いふ。痘瘡きはめてかろし。かつて年老の婦乃
物に馴しれるをたのミ置べし。穏婆ハ産婦にかゝり
きれまぎらはぬものなれバなり
小児臍帯たちきりし時。臍の正中へ灸をせよ。是

0005813084
B113333

國の風俗となり。病を祟といふといへどもさらに益なし。千金方に初生病なきよ。か弥く針灸をべからず。もし灸をすれば癇を生ずと見えたり。顯道が二人の子灸をすへざれど病もなくすこやかなり。灸治よりハ熊膽をねりてそのうへに艾をゆるしめあつるがよし

小児ハ八蒸十変とて折りく熱ありて俗に智恵熱といふ。これにまどひて療するなかれ。却る其病を加ふることあり。もし日を経ても熱つよく煩しき時は病と心得療治すべし

初生の児を暑月も綿にてつゝまする人あり。其子害あるなり。時服よりすこし温かにすべし。暑月包裹する児を見るに丹毒胎黄胎痍など病を生じ。あるひは死ぬる時ハすくなからざるも多し。張季明張介賓は初生畏寒といへる妄説にまよひ。暑月といへど綿にてつゝまふなどをしゆる庸医あり。あやまるゝことなかれ

小児は衣服大人に同しかるべし。小児は肌膚うすくして邪気をうけ安もしと。夏月も絹綿を厚く重ね着する人あり。ぞかなるの

多りあり。先哲の説に小児風癇ハ病を得る。衣
あつくきして汗のづるがゆへ風これより入と云て。
礼記に童子に衣裘裳をきせずと見えたり。吾邦にても
小児の衣服に腋下をあけて涼風を納る。是
も孫らしの裹裳をきさるとおなじ。世人欠腋
ある袖を着るといへども。其儀をおろそかにして熱物
厚衣を忌ず。故に子をあつくして病を生ぜしむる多し。
香月先生の説に。小児の衣類夏の時ハ勿論なり。
冬の時とても衫に綿を入て着せしむべしと
いへり。銭仲陽云。小児をそだつるにハ三分の飢と

寒とをわぶべしとあり。此あし語をもこゝろやし
おしひやをがよしとみるなり。儒門事親に小児
の病源ハ飽煖の二ッありとみえたり。大人も
此法を守るべし極て無病長寿なり。又貝原先生も
俗人と婦人ハ理にくらくして子供養ふに
あつく。只あくまでうまき物をくハせさぬれハ
きせて。ぬくめゆへ必病多く。ねる人を命短
貧家の子ハ衣食ともしき故。無病にして命
ながしといへり。能く心得べき事なり
婦薬条に大人より熱ふかき小児ハ厚く抱き着に

ゆくしめ。おれをあれど薬を用ひやかなどいふ事なき
きげんよろしくなれとて。むさとゆぶりちやうらかし
却る驚風などもよわきものになりず癖立ち祢歯の
生れして人となりかねるものなり。これによりて
大身なる人或　怜存なる者或ハ恐惶の子ハ十人に
九人ハ物立ちのねるものなりときこえり。又益軒先生も
小児のそだちかね病あるハ大半まけるによりて
起まり。貧者の家とても田舎のそだちハごく
かろくもへし。故にむかしより名医ともいやしく
そだちつくるがよしといへり。此二論深く

玉枕の臍なる事
初生の児天窓頗ふくきハ七夜の中さまりく
するとなどいふものなり。七日もたちなバ熱湯
に手巾を濡し。是をもつてむしてみるべし。又
初生の時眼を閉てひらかざる事あり。必驚て
療治すべからず。たゞぬるき湯にて洗べし。四五日も
すぎるとひらくものなり
小児に頭巾をかぶせる人多し。甚よからぬ事なり。
保嬰論に子を育つるに十法あり。其一ハ頭を
涼しくせよとみえたり。小児必用に小児をそだ

清家ニハ。まづ聖山乃茅木のごとく。風の気日に
めにあたらしめて。吹をうけさせまぜれバよく
成長するといへり。愚夫愚婦のくせにて小児を
あたゝめるをまもるとす。頗し誤るなり

小兒の髪を剃されも眼目よるしからず。又は頭
に瘡を生ずといふて。就てする事を嫌人あり。頭額
涼くなりて心ろよし。けれど小児をぐるんぜれし。
剃をきらハぬ児といふとも。するどき刃物を
つかふこと変きりふし。数十日そらすことも
嫌ふにあらバ。剃刀を用ひず剪刀を以て

かりて然るべし
初生れ児背を冷し。或ハいまだ尻骨のうごかざるに
さきに抱おくもありあるらしもれバ。必亀胸
亀背の病を生ずる事あり。嬰幼論にも見えた
さり。これら見るべきなり
嬰児を嚴密なりとも衾炉にて温暖をなすべき。
人の膚にていだくむべし。一切むようとどむる
にハあらじ。温暖をすごして熱をなせば。元気外に
もれて邪気を感じやすし。必丹毒胎黄等の
病を発すものなれ其害大なりし。大人も衣厚く

虚なしく沐浴する人は。腠理ひらけ表気虚く
して邪気を感じやすし。衣類も薄く稀に沐浴
する者は。皮毛固くして元気外にもれず。故に
邪気に感ぜず

小児の夜啼するひハ麻ら疹客悴なある時ハ。熊膽
を用ゆへし。小児の諸病を治る乃聖薬なり。
銭仲陽も。小児のある家にてハ。熊膽をたくハふ
べしといへり

小児に冷なる冷物ハ夏月も禁する人あり。其月ハ
伏陰内にありといふゆへなり。冷水生冷の類ある

をよにあろじ少し飲食する時ハ。熱を解て元分
よし。多くのむことにより害をなすことあり。
小児にたくるべきものハ。餅うまきものなり。
いましむるにあらざれハあし

鰻鱺は虫を殺す乃良薬なり。小児にわり好し食
せしむべし。諸の書に殺虫の効ある事を記せり。
丹毒なる痢を治る功ありといへり。されども
極てあしきなり用ゆべし

頭面の瘡に。膏薬ある時ハ。敷薬あるいハ菜箸。蜜あり
に用ゆる事なかれ。髪中ハ禿となり疵つくにある

ること多し。童女などハとりきて遠慮あるべし。ことさらに
手つけずいろふをおそれども、いらぬど腫ても
潰てもとぐるしく瘢疵となるゝ。又疱瘡の
一所にあつまりいでぬるを俗にようといふ。
ふつくりて急にとれず。それを待つ称て
瘡痂と唱へし。之あらひ落しなどまへるゝ
おしもいろはず痂のとのれとなれるを待べし。
醫説に小児面上瘡痂あらば急に剝し去て
是を潤すべし。人多くハ暁ずして反て此を剝も
を早くれば瘢となるといふハ誤なりと記せり。

此説かへすゞ李明の大なる誤なり。又張路玉
の云。疱瘡結痂にあり乾燥して落ざれば時々
真酥あるひハ蜜水をもつて潤べし。もし日を
経ること久しけれバ瘢痕となるといへり。是亦
いやまりなり。すべて医書に言ごとく
せるハ醫書なきにあらず取と心得べし

世俗の小児を愛するに。病もとえぬさきにも
すゝ灸治をなる人あり。是ひが事なり。まづ
小児ハ気血さだまらず。藏府かたまらず。筋骨
つよからねバ。酷烈に勝がたく病を生ずる

多し。先哲も小児ハ無病なる者に灸治を好まず
時ハ却て病をむかふるといへり。故に灸穴ハ點
する法。竇漢卿が云。五穴を取て一穴を用ひ
て必端し。三経を取て一経を用ひて正すべし
といへり。又灸炷する法。孫思邈の曰。立て點
すれば立て灸し。臥て點すれバ臥て灸すと
云り。かく灸治の法ハめんどうなるものなり。
然るに。小児ハ點も正しからず。殊更灸炷する時ハ
四肢を屈伸し。体を歪め。其穴へゆかず。只
良肉を破り。小児ハ苦痛せしむる事多くハ

益なくして損ありといふまじきならずや。
又凡て小児ハ猶さら大人ハなほ無病にして灸を
するすハ。素問難経仲景此書において嘗て言
ざる所なり。されども灸治ハ奇く妙く此効あり。
湯薬のおよばざる所灸治乃病も其症によりて
即験あるべし。即験あるが故に人もそこなふ事も
亦すくなからず。譬バ水火のごとし。用を為す時ハ
善也。物を害する時ハ悪也。されども古人も病ありて
治せざれバ中醫を得るとのたまへり。
止事を得ざる時ハ上手なる醫師に相談して

灸點をよく極し
今醫は灸點をするを見るに尺度をもちゐず。先づ
手廻しして長さを肝要として真穴にかゝ
はらず。度に目を用ひて縄を用ひず。章門腰眼
の穴抔點するにも書のごとくにをはからしめて
墨抔點す。古人は法則をもちゐし何乃捷法
ありてかくするにやいぶかし。五穴を取て一穴を
用ゆるはそしへをあまり丁寧を尽し點墨して
さて後日に其痕をみれば誤る事おほかるとぞ
いつの頃にかありけむ高位乃姫君の癇症は

患ありし時。衆醫談合して冬月に生の赤蛙を
服餌せしめ出来りけるに。是は赤蛙癇症に
奇効あれども時節遠せり。天の時に合ざるは
蟄虫なれば殺虫の効あらんや。東國通鑑
に徐稜といふ者乃母。冬十二月項疽を患ふ。
嘗て云。蛙にあらざれば愈ずと。徐稜冬月淵
にゆきて泣き號泣して神にいのりけるに。蛙樹上
より落きたる。合薬して母にあたふ。病ひ速に愈しと
記せり。此篇を至孝のあまりしるし。如にして
指抔にて語るべからず。徂徠先生は云。今乃代の

人ハ生まれ弱く。大名なれど弱きハ。皆々若は仕なし
無数事ありと政談に嘆せり。又宇治田先生乃
曰。君の痩たると疲たるとハ。多くハ其臣は忠と
佞とによると云々。二先生の言誠によむべきなるかな。
今世士人の主君に仕ふまつるを見るに。君乃
疾病もなく百年の寿をたもち玉へかしと。
計て禄ふ人ハまれなり。されバ文乃そこふまで
もなし。道勢ある武道ハ忘れ。抜刀は法もわからず
して只貨殖の術はのみ忠勤ありとおもへて
人のなしむをもかくりて目前は損益むなりに

目付。後の災をまねかんをかへりみず。まして大変に
処へハかりしも心付なく。只為くとりかくて。忠思
の様を画に似されども。是君恩を報ずるに
あらず。次ハ実ハ其功によりて立身せんと我身
乃栄花をおもふより出なり。直臣ハ君の為に
其身を忘れ。臣を守る人の所為とハ表裏せり。
推ていへバ大なるとがん人なり。退之が曰。未有下好
利而愛其君者上といへり。故に主君の不養生を
諫いれんともせず病あるをもいさめ進まず。末代君は名
を讃ることをも無へりみず。猶又民富国ゆたかになる術

には露いさゝか心をとゞめじ。是皆孝悌忠信の
道を一切なくさんためなり。古語に曰。不宝金玉而
忠信以為宝。亦曰。一年之計樹穀。十年之計樹木。
百年之計樹徳といへり。あるひは三年耕して
必一年の食を余せるの政法なり。是おのれそ
君恩をたもふ臣のつとめにて心を尽きなきなり
ぞかし。文武によらずして君につかふるは。盗賊を
まぬかるまじかりし

医学入門に寧陽侯の孫。驚風のごとくにて百方
効なし。銭瑛に見せられ則児を地に座し免。

盥盆へ水をたり是を手をもさみにさせしかば
驚啼頓に止みけり。人その故をとふ銭瑛がいはく。此
三月なるに小児厚衣なり。且人の懐抱はなれず。
其熱鬱して内にあつまる故にあつまれば火邪
心熱を去気をうれど臓気平になり疾いえし
いかんぞ薬を用ゆるをせんと答しとなり。今世
富貴の家に多く有数病症にてそれ人をよ
小児の常なるとさはなさ。却るなくされさるゝ事し。
も銭瑛のごとき医師もなし。又有るにしても
病家にては中しる療治を用ひずながらし紀

害にならずや
初生の児に乳を吸しむる事。生れ下てより三晝夜
ハ兒をかつゑしめて飲しむべし。醫者も俗人も多く
其のおりある人ハ是を胎毒と胎毒下ると称しまさ
とて。二日も乳を飲せず湯薬のミにて並あるへ。
大なる誤なり。既に二人の子癖瘤かゝつくまけて
次子ハ虫疸極てすくなく薬を用ひず平愈せり
至上二人とも無病にして成長せるを見れバ
早く飲せるをよしとハいふべけれ。亦富貴の
家にてハその俗かりし外の産母に乳汁

を飲せず。他婦乃乳汁ばかりにて養育せしむる人と
なりつぬ。然れども他し乳母を甲撰みたる者にて出生
あれず。湿毒ある者。瘕病家の女まゝハ心のうる
くなるもあるによりて。其気をうけて児子稚く
の病を傳染し。疳瘡もおほく。癇疾をも生じ。
夭死の患へ出来るもの少からず。富貴乃家とても他婦
乃乳を飲せずして。産母一人の乳汁にて養育すべし
毋子ば育ることの肝要なる事ハ。側につかふる人を選まる
をつかひならむる人をバいましめおくべし。乳母
の傳ひとりいふ者の善悪乃差別もなし　に子をあ

つけ置べからず。貝原先生ハ云。貴家の子をはやく
より乳母ニまかしむるゆゑあしく乳少なかるもしむ
べからず。先第一の事なりといへり
三益先生乃醫断といふ書ニ。初生の児ニ二三日乳を
飲せず。胎毒を下すもの也。痘もかろく無病なりと
記せり。又先生ハ醫按を集し建殊録ニ。先生ハ
子女一人ハ痘瘡を病て死。一人ハ痘瘡ニ係て
九死一生なる時。紫圓を用ひ救したる試哉あり。
此両児うまれし時。先生乃見解ニてハ四五日も
乳を飲せず。胎毒を吐下さするべし。されども

一人ハ死。一人ハ重き痘をわづらひしとあれバ
是を考へ飲すなども無益なり。当時一方ハ大家
あるハ古益もろ甚理ニくらしいかんや。名醫ハ
さぞかし人を殺すこと多かるべし。附乃按ずり
小児抔養育術ハ絶ざりし。是ぞ天性自然乎
のつとり。智力を用ひず養育すれバなかるべし。
是のことにあらバ。我れ等も飼りよせんとおもひ
ぬれど。却るあしく利る不知ものあり
今世公家乃君達姫君の侍女ニ子を産し人稀なり
故ニ小児を養ふこべを一切あらざれども。枝持

志あふ醫者の謟諛の言を誠とし。亦己が私智
才覚を以て養なふが如くに養育に似たる不養育
た多くして。病乃種となり命もちゞかし。是
夏の虫の火に入がごとし。寛延戊辰の夏朝鮮
来聘の醫趙活菴に百田金峯といふもの小児
養育の法を問に答に。小児ハ艸木は春に長ずるが
如し。人巧を假るべからず。但其飲食を慎のくと
答ふ。然るに此を乳母ハ卑賤者といふとするや。乳を
もとむるのミを役にして養育のことにハいさゝか
かまハぬ國風とぞなる。是ハ古以来の癖にて

ひとへに医理にくらきゆへなり。子を産ぬ老女
より。多産の婦乃みづから小児を多く育てし
者を附添。事一に之良醫をえらんで。扶養
志あふ益あるべし
不具支離ある者ハいふにおよばず。頭面に瘢痕
に至るまでも。父母と醫者との科なりと知べし。
高貴乃人ハ。侍醫と左右近習の人。あまたひ
よわくざ侍よりそこなふがた多し。又賤は者
田舎乃児ハ其自然に任するにより夭殃なる事
まれなり。あまり求めずしておのづから養生乃

是にかなふといふべし
深川に島村某と云ふ富家ありしが。一人の
女をもてり。父母あさからず寵愛せしに。多病
なりしかば心を尽し養育いたしけれ。然るに
父去歳なりしも横死をとげければ。江都の
の住居もうしとありけりとて川口といふ田舎へ
母子引移りぬ。然るに一時飛鳥山に遊びし
おりから。かの母子に逢ひ彼これ物語せ。初し
田舎はよろづ不自由なりといふ。されど田舎は
ふじゆうなれど。却て身の保養には田舎に

しくはなし。其女など乃はじめは茶を飲に
まかりしといひけれど。誠はのふぶくしく女
深川に住居せし時は。多病なりければ加みち
及び相里醫療を尽しても。更に其験ありしなり。
川口へ移てよりいつとなく病も癒ぞくすに
ありしと語まり。是れ八求もして養生の術を
得たり。深川は賑なる地ゆへ。日毎より旨き物を
くらはせ。夜あそびは美器乃うへ。若に瀟酒のみ
茶を飲せしによりて。病も多くありけるなり
熱湯茶あつきもの飲食する事なられ。大キに

歯抜損ず。壮歳にして歯ハ落し人をみるに。多くハ熱物熱湯を嗜み。亦ハ酒を強く飲む人なり。されども生質により熱物熱湯を嗜み。老にいたるまで牙歯まつたき人なり。百人に一二人のミ。性の変なる人ともいふべし。法則とハ為難し。歯落てハ年たけ齢ひかたむきての楽うすし。必しも熱湯茶あつきハその飲食をさくるべし

歯みがき薬といふて世に用ゆる処ハ。白堊を以て製し薬にあらず。故に年わかき時ハさせずとも可し。年たけぬれバ牙歯ハ痛ことあまたなり。

大和本艸に蓼螺ハ殻へ塩を詰、蘩蔞汁自然汁にてあらふ家方なり。歯もきれいになれバ風流だて男といふとも是を用ひて可なり。香月先生も良方なりとて。老人歯薬に記せり

新汲水ハ毒なりとて。高貴乃家にハ。汲置しを飲食に用ひなよし。常士にハいさ〻是を考家に嘗て其説ミえず。養生訓にもなると新に汲むハ湯気さらんまで生気あり。久しき汲置ハ悪き物となり。生気を失なふとみえたり

薬二番煎といふて滓を煎し用ゆる人あり。白湯

に同じ煎するにおよばず。振薬は二三度ふり出し
飲て後に残んじ用ゆべし
湯薬は瓦罐を用ひ煎ずべし世人の用ゆる所
おゝくは銅罐なり。木瓜入る薬を煎ずれば
多くは銀出すごとくなり必用ゆべからず次に人家
にては銀罐を用ゆれども是亦金銀銅鉄は
毒あり○其の内にて銀は毒無うすしされども
富貴の家に銀罐はつかふは是非此ばかり
多数にはつかふ泥炭薬を好みて此の器るべし
生姜大棗乃二品服薬のうちに必くはふる物あり。

今醫は生姜は病家に入させれど大事なき一向に
省略して加ふ数を見ず然れ共病家に君 邦乃人には
泥の痞れと云出し省略あるゝとを見ゆ。大棗を
加へざる症は中満食滞又は薬のつかえ症も此
人には用ひず。世事と遠む薬をもくしよても
省略されど方意をうしなひ薬効なし。古人
立方は主味佐長にして其世分深れたやすく
をしはかりがたき形なり。後藤氏流は肉桂の
入方剤は大棗を入れ。桂は甘味を常たれど
去ゆし。傷風約言に詳し至なり

世人乃重病の人をとりはからふを見るに只食事に
のミ心を用ひ。命は食にありなどいふて。しばし
食をすゝむるをよかくぬるなり。世諺に命ハ食に
ありといふは。病人の食ハ事にハかゝらず。人の生命
の涯を平素に飲食を慎しむ時ハ寿命ながく。
慎しまざる時ハ。寿命ちかきといへるなり。
岐伯曰。諸遺者。熱甚而強食之故有所
遺とあり。又仲景の説に。病ひ新に差たる人に
強て穀をあたふるまで。脾胃の氣なほ弱くあり
消穀せず故に微煩するあり。穀をはらくへざれば

則愈といへり。亦醫説曰。食少則臓氣流通而少
疾と見えたり。近古豊臣秀吉元亀九年六月。
因幡國取鳥城を攻む。城兵糧絶くて。じ多
餓死におよび落城もあしに於て秀吉糜粥
を煮て城兵にはからふ。多く食者ハ即死し。寡く
食者は恙なかりけるとや。此事を考へ
必しも病人食気すゝまぬに。強てすゝむを
あたふべからず。殊に大病愈くものなりて。
飲食をすゝむべし
重病の人に醫師戒めらるゝ事ハ。いふまゝによむ次

えより此事あり。其次は看病人をえらぶべし。をろかなる者。或は心なき婦女に任するあれ。人これあれども薬を用ひしよく。夜伽の人も疲ずとなるをざりれ此ありて。良医乃薬も効を顕るゝかさし。看病人は正直親切にして。医の教をまもりもこゝし其医薬の道をもしれる人を選ひ附副べし。安楽乃家とても二三人の看病人を定め。昼夜共病牀をもはなれず患者にならし。餘人は薬を持て手傳するがよし

饅頭羊肝餅の類。甚べく砂糖の多く入し蒸菓子干菓子。人をそこなふ事おほかりければ小児にあたへられず癇疾を生じ。大人もこれを多くくへバ。腹痛吐瀉霍乱等はうれふ。それ世富貴乃家にてハ。只食物を専らむねと孝慈とこゝろ得え。砂糖は多く入し物は上品とし。尊貴の饗に備ふ。却る不孝不慈は甚しきなり。まれにして医乃者をもつて諫むらうをとこまで。兼好の云医術は学ぶべし。身を養し人をもすくひ忠孝の勤も医にあらずもんであるべからずと。徒然草に見えたり。また丹水翁の程明道の語によりて曰事親者事君者誠正不

「可不知醫道」といへり

飴餹に害ある説ありて。みだりに老人小児に食せしむる人あり。小児多くくらふ時ハ府疾を生じ。老人ハ噎を生ず。中満吐逆秘結牙歯等の病も。飴餹よりおこる事ありとぞいへり。老人小児ハ多く喫べからず

世俗に其艸ハ乳をとむるといふて。子持の病ひある時薬を用ひざる人あり。麦芽ハ乳をひやすものといふなり。飴餹を忌といふを其により誤て多くなる事なるべし

牛蒡ハ腫物にいむといふ事本據とあらず。本艸に風毒癰疽を治すとこえたり。又普濟方に。を緩しの種物に牛蒡を粥に入煮て食す法にあるよしを記せり。又王好古此云瘡瘍を治するにも連翹鼠粘子とおなじく用ひて別して神功ありといへり

温泉の水を遠所に汲よせて浴する人あり。無益の事なり。温泉ハ天工の自然にして一水火の二ツ地中に相合し熱湯となる故に諸病を治するかずかずの病も愈るなり。冷水となりしを薪炭をもて

沸ける時ハ此の浴湯に異なれバ。只硫黄ハ臭ある
のミ。其うへ時日を歴て来るゆへ腐水なれど。
私に汲しより性あしかるべし
益智飲といふて。益智木香霍香の三味霍乱
食傷に用ひて験すこぶるありされども今世の
医に修合する者甚だ稀なり。然れバ薬ハ多く
入を出しにてあるとしか見えず。さまで商坊ハ庸医
鄙吝なる者を撰て其價の下直なる麁薬を
求む。おしも價のむづかしき薬を用ひずして。
病者の害をなせる多し。欲をし甚半なり

藿香。黄芪。木香。白芷。枳実。胡黄連。大黄。縮砂。
此等ハ漢産に限りし品にて。和産ハ假薬なれバ今
世の医和産を用ゆる者多し。漢産ハ効験ある
ものハありぬれど。纔の費をいとひて用ゆる者なし。
白朮 青皮 栝樓根 羌活なども漢産よし。
和産ハ性あしく。神麹も自家にて製し用ふ。
薬肆にあるハ本製にあらねバ庸医ハ誤り用ゆる
薬品大概かくのごとし。一々かぞへ尽し難し
天灵蓋 和名天石 しやれかうべ　紫河車 一名混元衣 ゑな　人肉 人のみ
紅鉛 婦人の月水　童便 小児の小便　首胎糞 初生のかにばゞ

糞蛆（くそむし）一名天漿子　人中黄一名金汁（大便の汁）　仙人骨（小児の髑骨）
人中白（小便のかす）一名秋石　焼人糞（焼たるくそ）
糞缸中漬物（何によらずくそがめの中へ浸したるもの）此等の類汚穢の物を
奇薬として用ふれバいともけしからぬ事の様
なれど是偽医邪術の者の所為と思へし。故に
蜀道の人には他薬と偽り投ぜしむといへり。いか
ましくあるべからぬ事なり。抑吾国の人は性
清浄を好む義は道にあるとして獣をもく
らふことを忌きらふ。まして、かかる類の物をや。
人にして人をくらふは同類のわきまへなし。是

畜生におなじ。たとひ功能ありとも他薬を是に
代て不可なる事はあるべからじ。李時珍其非なる
を本綱に弁ぜり。都て庸医偽医は医乃
正路を失ひ狡黠にしてありふれたる方薬を
用ゆるは浅量の薄きよりて後人へ。偽人に奥深く
おもはせんと。造意に非常の異物を多く集て
用ゆ。正しき義を忘れ利欲にまよひ心より人を慰
ものとし人を穢するにいとひなし。欲ても猶
あまりあり。丸散丹は薬を投ずる時よろしく
方剤を穿鑿して後に投ずべし。姦医に欺かれ

君父の賜なる大切の身を汚さじとかしこまれ。いつはりと
奇妙不思儀を説とも。必まどはさるへからず
屠蘇散の屠の字。年のはじめにおとぬき用ゆる
ものゆへ尸に一点を加へ戸冠にかきし。独参湯の
どくといふひびきを忌てたゞ参湯といふが如し。
然る祝表久しき風俗なるなり。軽俊なる人
吻黄なる家当生をあやまりと誹するもあり。それハ
己が私智のせまきがいふ処なり。すべて病者に
害なきことハ。国風俗習に任するを佳ともす。忌
杯そすべきハ不学ル医者の業なり。薬に誤り

あれも立処に命をうしなふことなり。慎むべし
雨水ハ毒ありといふハ誤りなり。養生訓に天より
すぐに下る雨水ハ性よし毒なし。器にうけて
茶を煮薬を煎るによし。雪水もよし。屋漏水ハ
大毒ありとミえたり
雷のおどろしく鳴る。落家に到りてハ鉄壁にても
打砕く。ふせぎやう人力のおよばざる所明きし。
されど用意あるべきことなれば候まゝ。あしにいふも
中しおそれながら。左右国ル　明君。あるは
市辺へ雷の落るを防やういくらん将なると

歸させ給ひしに。周公の西にさるに一云此ゆへく
まうけるものなし。爾時（トキニ）松風せありける家の世人
の怖るしくて雷の鳴時ハ門戸を閉（トヅ）て親族（シンゾク）家従（カシウ）一席
に集り居て経を誦（ズ）し香を焼（タキ）薪（シ）火紙（ク）焚（タイ）て是ぞ
死をのがれしはいかにしてかくて其ためしありけり。あるは
よりしる所へ雷落て同し枕に打ふれ一時に
家をうしなひし者もありけり。遠慮なきゆゑなり。雷
の時ハ親族あつかりしこに分（ワカ）て居（ヲ）がよし。一人二人
死うせても残る者ありて家相續（サウゾク）も是雷を防（フセ）
ぐ用心なりと此物語ありしとなん。たふとき

多葉に重し慎し
樅樹（モミノキ）の生りに家居をつくれば。樅ハ立根（タチネ）横根（ヨコネ）なく
に根むかり短（ミヂカ）し。大風雨の時倒（タフ）るゝの変ありけり。た
とへ小樹ありとも生立（ソダチ）の早き木なれど心をつくべし
此聖孟子も知ル命ヲ者不立タ乎巌墻之下（モトニ）ニとい
へり。是も摂生の一ッなれバ爰に贅（ゼイ）せり
今世の医者といふ人ハ愁苦を救（スク）ひ世すくべきなれ
賢にありけれバ偏（ヒトヘ）に我身ハ富（トミ）さかふべき為に医者と
なれるが多し。賈誼曰古ノ至人不レ居（ラ）朝廷ニ必（ス）隠ル
于医卜ニとかり。亦司馬温公云達（スナハチ）則為（ナリ）良相ニ。

不違則為良醫といへり。此嘗ハある俗ざしとハて此
黴隔せり柳下恵ハ飴を見て。老人を養ふべき
物とおもひ。盗跖ハ是を見て鎖にぬりて盗の便
よふかへんとおもへり。是ハ異なる故に学術多藝を撰
て療治をおこなふより露ちり人の益するを
あらざれバかへるてき療治者のいふ事を信じ人ハ
是とおもひ大切の身を委ぬるより忘病なる人ハ
いつとなく病を求め天命の限りを盡さぬ人多し。
今ハ世才量もぐれ士氣ある人ハ医を生業とし
いやしき医者ハなき数を忌きらふていつむと

なきば良醫ハ名を後世に風靡しても富につかふる。
時ハ。食禄も薄く技藝ハ徒のごとくいやしめられ。
青雲ハ志ハ無數なり。大功を建し家を賑はし
禄位のある人とも接なりの事只利欲ハたのしみに
心を労しまつまく商賈ハきうれ地公に同じ。なられぬ
とも立身を心懸る身あれバ志を遂ぞとも此世ま
いろうん甲斐してあるべけれ自棄といふ身まて
学者も志げなし。且我身のミハ子ミ孫ミにいたる
まで寸禄を守り。立身出世もなるべし。学して功
なき身の上なり。又古人の言に。舐痔吮瘍ハ

術といふハやしめ事とあり蓋醫者意也にて。心乃もちかたを専要とし。良将の敵に臨く変に應ずるにハ比せし。術あり。張子和の曰。醫貴レ有レ才。若無レ才何足レ應レ変無窮ニといへり。然るに今時の医となる輩者ハ心根の愚なる者。又ハ生れいやしきものなかでハなかなか出世へ不。本意ハ取失ひ専ら利を求むることゝし。志士のさげしむをも口たしなく。おのが心も恥じ。かく薬なども術にひろく。今世中にハなかぬ庸医の多きハそと是よりおこる事あり

傷寒論といふ書ハ方法の祖。和漢の名師哲匠是を規矩とせざるハなし。此書を作りし張仲景といふ人ハ。長沙の太守なりといへども財禄にかゝはらず。なるべし。かゝる身をすてゝ医術ハ神魂を竭され亀鏡乃正典を著述ありしなりとぞ。またも仮あしきハ醫師を重禄の士たるなり。本邦今日医者ハとよばざる所なり　我邦も室町家の比までハ。禄位ある人も醫術に。諸人を救しこと見えたし。信長記に将軍義昭公頃なりし比。米田壹岐守宗賢といふ人の薬を飲めりしに宗賢ハ武事

にも遂せしと記せり。されバ医ハ仁人の術なれバ
身の利養を忘れ清廉にして人を助け救ふに
こゝろ力を用ふべき業なり。しかるに爵禄に
かゝはるべからず
不択と世々に称する医師ハ。父祖の旧地にて人あり
の家しくなし。故に家業に未熟なり未練
なるによりて人も是をあなどり、おのづからいよいよ衰微に
見得るなし。殊に庸医は誤り多く人の命業に
拙し家もありて医しもなれども市医をなせども
我を世俗の常なりといふめしくいふされども

主君に功ある事なく。灸術に恵を施もせず身を
齢るまで素餐し恥辱とも思はぬ者多し。され
ば不忠なる医者なりといふべし
或薬肆へ交趾肉桂を求にゆき其家に交趾とハ
東京のことなりといふ。其家の医者も大抵知り皆
松浦肉桂にブキ桂肉桂の類を用ひ。交趾肉桂ハ
価もむつかしくとての外なるなり薬肆もあれバ。収
貯せざることなり。聖人の曰。工欲善其事必先
利其器とのたまふ。医の撰ぶ所ハ薬物なり。されバ
医者らしきもの我身にもよきを用ひて。僕隷なども

物好につゞらせ。薬箆は銀物に耀して人目を
おどろかし。甚だ高きは家にまつらひをも移り。
僑舎に言閑を附て薬礼はすくなからざるを計て。
外見をかざりて財宝にのみ心を移し。医は本心
をうしなひ。襤を織金にてつゞりしが如きものを
おほし。是はまゝの医人にいふべし。近比も武夫
も亦かくのごとし。まゝ馬を選にあしらへるといふて。
四足の筋尾筒は筋を切離し足どり伊達にして
馬場騎のゝ華兼なる馬を良馬なりと賞翫
する人多し。あしらへるを見て弱く用馬には思ひ

もちゆれバ。火事場騎にするは用に立ず。実用の馬にハ一て
犬猫を飼にもおとれり。才一ゝ筋を切断する次
不仁いとかなしむべし。又鎧を仕立るに爛の
吟味もなく焼具足やなまなか祢の上を漆にて
塗のみぎ。飾を結構にして一領美ゝ敷れども。
鉛刀におなじ。是を着せんより素肌の方働能
自由にしてまさるべし。真田昌幸は両刀は欛を
木綿の組條にて巻たり。されども身ゝ両刀は
に正宗にてありけるとぞ。武士たらん人々
よく従ふ事。此こゝろむきを慕ひ用ゆべき也。

今は世の人は実事にて本意をうしなひ。只
愚人の目をよろこばしむるを宗とす。悪べきは
あしきにはあらずや。是にのみならず医者にも
あづかるなど。所々が癖あれど紙筆を費す
見る人もあるしあく

世衒に学医をさしがまじりぬといふ。あれ言者は
心あしけれ共世儒医学医と文才飾りありて。
治術に熟しある人のやうに衒はし。書物あと作
る人の為に勤る所どうしひきく小日用を廃して
不急を嗜み。正を厭ひて新奇を好み。みだりに

評を付文作もき。前人を破毀するを専らとし、
又其解盡がらざるを強て解知。或は非なれ
草木鳥獣の主治を正し治術にさまでかゝはら
ざる紙上には言に精神を費し。たゞ己が才を
自負しほこる者多く。俳の医術を兼全せしは
まれなり。皆浮華名聞の徒を知をすてゝ遠近
をはしとむるはあやまりあり。故に議論の逞して
治救の術に疎く理にかなはぬ事多し。さいへ
人の生を戕賊する便佞阿諛欺詐は医者篤
とは各別にして同日に語るべからず。亦夫に良拙の

まゝち雑き医なり。薬物に泥て時めける庸医と
薬を懐中する良医とあり。古人の詩に耕牛
宿食なし蔵鼠餘糧ありといふもさもあらん。
此三等は医者の良拙を明眼の人ぞいくらも
見損ずるなり。まして眼量は雑き人にハ一切に
見分がたし。粗医師の良拙を知れる正直なる
人にとふ也。実学ありて経験は積る良医を選び
服薬すべし。よく〳〵良医も時の譏謗に屈託
せず。素朴にして学問は療にのみおこたるを務
世俗はるにはづかしめぬゆへ多くハ貧なり矣

ありとて療治をおろそかりとはなさるべからず。実に
医師でありながら諸の藝術は上手名人も富
そのまくなし。士人も忠孝慈悲の実ある人に
其食禄によりて福有なる義ハかりてなし。文武の
たしなミハなく只元まで人を見下し。衣服飲食
家作等に慢る所もなく。分におよびて奢侈する者に。
却る富栄ある者なり。それとも如何や家の法なり。
一わん富をうるといへども。没命よりかく諸の具
家居ともにのちまち人の物人は家と成る事
必せり。是空鐘の中に物中むなしきがごとし。

いとはるれき事にてぞあれ
今の医者ハ偽り多し。師のさづけなく教なしへせきて。
方書の二三巻もよみ見ば。万巻の書を読るごとく
おもへり。つまらぬ虚勢表裏も弁へして。学医を
も蔑如し。知らざる事を既に知れるがごとくにもてなし。
他人をあざむきまどはし。偶中よりて謝礼を
請く。是偸盗に甚だし次吉斎になき名ぞと人には
いひてあり出面し。心のとりていかであるべん。此
歌のあらはしかれえ左。又小文才のある医者は。
某氏ハ回春むくりそんそ抄れを方彙一冊あつく

抄しまとも。子医ハ回春ありとも一動首尾熟
読せしそ。百人に一人も稀なり。回春の多に
入学銀ハそ世にはじて八粒母炎医とすそ云へきれ
庸医に同薬をいふなり。病人を見て病症を西とも
東とも断決せず。望洋として処方をうかゞひ
時。まげ無毒の薬を投じ試み半ば尽きれ病に
緩あり急なり。急なる数病ハ時日を延るまれし。
同薬を用ゆる事に緩なる数病ハ大なる害成
なきられど急病は危に到るべし。偏室偏食の
類は。最も急にして毫釐もちがへば死生多

と鹹めし。その医に同薬を用ゆる者あれはし。
用心せずんばあるべからず
今医の脈を診するを見るに心志ありかなれば
身体正しからず。手指頻なるぞ。或は指を放
さす人と物語し。又は座にかつて成ば病名を付。
そこつに尋ねちらし。病ひ見とゞけしれ顔色を作し。
もうしと病家を出去るのみなり。古法にもとづき
捷法あるまゝにもんで人を殺の巨賊なるべし。
示す二十四種の脈。一々にわかり知るゝごとくにてなし。
洪弦濡などゝ俗人の耳に遠きことゝいふものなり。

悪しき虚語あり。夫脈に浮沈遅数虚実の六
脈半をも診察するのみ。外十八種の脈を
さぐるかぎりあれがたし。脈経に脈ハ指下に明らか
にありがたしといへり。又古人の説に。脈のあきらめ
がたき故を古今は通患ありといつて
盲者に処方施治する者なり。盗賊にことならず。
それ医に形声色脈の四診あり。形とハ其形
を観て其病を知る。声とハ其声を聴て其病を
験る。色とは其面の色を視て其病を察し。脈
とは其脈を診して其病の死生吉凶を決す。

是療治を行なふ肝要の法なり。一ツも欠べか
らず。盲者すそれ。其形容面色をうかゞひ
見ることかなはず。四胗の要法の中二ツを闕なり。
又茶の真贋新陳もまぎらはし。めつきらかなるを
颯汛識ざるは舟人のごとし。大膽なるもの數多
盲若なれど。利の為なれば論するに足らず。
聖人の身體髪膚をこなひ傷さるは孝の始
と教たまふ。大切の身を盲者にゆだぬること。所謂
卵を石に投し。火に身を投するものなりといと
あやうき事ならずや。是を求るは盲者の医に頼るまで

きらいの医賊あぎてかぞふるに暇あらず。
なげかしき事なり
醫は道とされる顔も數めしむるは鍼科で生れる。
ある時商家にて出會せるに不快なりといふ。予
戯に医の病あるは大なる恥辱なりといひ
つまむ。彼盲人あざけりて大方脉は病ひ
あるを恥べし。それがしは鍼科なれば目くら百歩
の外を見れども其睫を見ることならずと
韓非子の語を引て遁辞をいひけり。大方脉
鍼科いづれも人の病苦を救ふの術にして

一のことなんぞ二ツあらんや。いとおかしく笑に堪たり。睫のみえぬといふも。灯臺下暗しといふも。我身の過をみづから見えざる他人ゆへ。はじめとの教なれ。徒然草に。をのれを知るを物しれる人といふべしとこそ見えたり。我身の病をしりて治する事もならで。人の病を治すにもおよぶべきにあらず。慶長の比山内對馬守といひける人。縨武者になるべきものを家人に入簡をさせられけるに。桐馬兵庫といふ者えらびて姓名を入簡を。對する事意を問ふに。兵庫が云。人の心は平生なし。見ゆる所と大にかはれるなり。私心底はしらぬの

故は。吾心のわればかり私くはしく知ては縨の列に入べしと也。此外学なる者は不仕候ゆへ。左に自身をやとひ候。脇人と申ては。又にては一左。此輩別に記すにたしかには料てあり。がくしと云けることなんぞもとして関ヶ原の戦に粉骨してある名を極めるとかなり。此識科旨者をおさなき時に明を失ひけるよし。睫の見ゆるやら見えぬ事の由らあるまじ。人の似口なる。桐馬などにおもひ含たらむ大きに叱られ頼むし。かかる書を読にいふ事れ法問にて。おのが黒白ざにまどうる奴は。まてを知るさぞかし病家の人の鉄旨にあれる事をいふなるべし

是又口才ある医流に誤らん事をおそれて贅しぬ
医を業とする者ハ己が才ハ勿論妻子に到るまで。
傷寒痢病黴瘡疳疾疝瘕の類。家内に煩ひの
あるハ心ある医者の殊に愧べき事なり。此等
の病ハ養生の術ならざるより起て。いづれ
もそれの病なれバなり。上醫ハ未病を治すと
いふて後来の事を兼てはかり。平素無事なる頃
時に心を用ひ病のおこらぬやうに養ふが医師
の肝要也。古云與其病後服薬莫若病前善
自防といはしめたり。さきに小児ハ未病の治を

尽くして育し。聖人も父母ハ其病のミこれ憂ふと
のたまひ。又赤染衛門が子の命に代て死せんと思ひ
し時哥にかはらんと祈る命をおしからでさても
わかれんことぞ悲しきと詠し。兼好法師も子ゆへ
にこそ万のあはれハおもひしらるれといへり。かく、
思ひたまふ我子我孫に。疳疾労瘵眼病など
出来やすく養なきハ。治療の術を知らざれバなり。
旅居中といひし家人と未病の治を宗とせし
明医あり。病ある児を見てハ此児元来病なき
に愛する者の是を害するなりといはれし

とらや。医者も己が身全(マッタ)からずして人の病を治せんとハおぼつかなき事にてぞ侍れ。已ハ本也人ハ末なり。大學に其本乱而(テ)末治(ル)者否(ス)矣

知命(メイ)にもいたらぬ医者に歯の落しなどを愚(グ)と知べし。天地の際(アイダ)に換(カヘ)がたきものなれバ我身ハ養ひも出来ずして歯が落るひも眼病をわづらふもの。いかでか人の病を治むるの術ハあらんや。君子ハ人を正(タダ)しくせんとして己を正しくもとむ。兼好も我をしらずして外を知るといふ理有べからずと書(カ)きたり。貝原先生ハ八十三歳の時夜細字(サイジ)を

かきまなく牙歯(ゲシ)一ッもかけず。目と歯病なかりしとなり。医の道を業とする者はかくありたきもの也。一大家(タイケ)乃執事頭の云けるハ此比の勝手役なる者ハ風俗(ナラハシ)にして損益(ソンエキ)の計策(ケイサク)をいふもの多し。其いふ者を見るに多くハ貧困(ヒンコン)なる事あり。我小家ハ貧(ヒンジ)しきを補ふ事なきもなし。況(イハンヤ)國の命(イノチ)も農人(ノウミン)なるを知らバいさゝか心付かくして智恵ある者を主人ハ貨(タカラ)ハ殖(フヤス)の術を計(ハカ)るも及ばざる事なり。計策(ケイサク)ハ本也知らざるより出る事なれバ人のあやまちをつくる

たとへば弓手に益あれハ矢手に損あるより外なし。
総て利害の法はかくのごとし。聞耳も狭くてしと
出来り。なれバ庸医と誇すると符契のごとし
今世商坊の医者は額に月額の跡あるなり。さて
持はあれの侍が多し。商乃ひとしなみ黄金を
なし。流石なるれぬ下司業ハ苦患なきをこそ
におぼり書もでき。片仮名の医書ハ読ずより薬方
の功能をおぼえ。医者とたまひ付合数あり。凡て
を扱ふの芸幼ころよりの学び習ハされど人並
に出来ねバ晩学にてそきまかりしと暇をやるといへ

ともどこかしこに鑒みて多くの所など雖においても山やかなる事が
ある。又戯場の優者も一枚招牌大立物といふハ
いづれも童子より舞台へ出る者なるよし。又北里
の遊女も。廓成長といふて禿童より遊女乃
中にて年長せし者に限られたり。太夫格子とハ
なし。むぞと更に容貌のみを一とする遊女だち
かくのごとし。亦馬僕舟人米を搗薪を割の
さぐひ。無造作なる業て下賤乃活業も童子
より仕馴し者にかぎるれど。糊口ならざるも此なり。
古語に巣居知風穴居知雨といふ。士農工商

それ〴〵の家業藝術。童子の時よりこれを見る
ゆゑなれバ学びし去にハ不傳の妙なり。されバ徒に
習ふより馴るといひ。又知らぬ呉服商賣より
知つたる米糀あきなひといへり。理なるかな。
小なる藝わざも業をうけ稽古してそのいたりを
身を労し心胆を苦しめ勤ても。決して其藝
達せず。いはんや医ハ人の術にして其道殊く
通じがたし。博学多才の人といへども壮年より習ひ
學てハ何ほどか心やすく治を施す事
思ひもよらず。古人も一期之計在幼少幼少而

不学老後空といへり。然るに医師の良拙なりハ
他の藝術よりも遠ひ俗人にハ一向知れず。又夜しへ
より人を教ものハ死といふが法あるに医者
の教ゆるにハ解死人の沙汰もなし。口給と
とりなしのまゝにて俗人を用ゆる事みとなり。
追院の僧禄を失ひし士。折本の商。此等
の輩が。世をわたる便なき故。心易きをかはず。衣服
をかへて免医者と変ずる者日々に増月にまし
多し。予が住近に北里の傭書を業とせし
者の医者と化るなり。云語同断欲息するに

甚なり。かゝる輩は烏の頭白く馬に角ある類
ゆゝしき。ふつゝかなる事を説宣てだましけども。
俗人ハ誅ぞとおもひ身を委捨て世を早くする
ものゝ多し。樂天の文にも狐の妖ハ猶浅し人の
人をたぶらかすハ甚害深しといへり。額に鳥居ある狐な
月額のあるハ悪医といふ招牌なり。病家用心
あるべし

虞天民の曰。世医偏門を蹈て民命の医に夭せる
者おかりしといへり。今世古方家と称て妄庸
浅術なる類医生等病症の虚実をもしらずして。

偏に攻撃の剤のみを投じ。軽病を重く変じ。
重病ハ危きに到る事たびたびなり。抵当湯。承気湯。
十棗湯。烏頭煎。四逆湯。備急圓。瓜蒂散。紫圓。
滾痰丸なぞの湯薬ハ救人の神方なりされど
用ゆる人規矩を知らざれば。却て甚害あるべし。
粗工の用ゆる所の方剤ハ。或人の歌に。病城を
知らぬくすしの毒の矢ハ命を的にたつぞはかなき
と侍り。古方医の未熟なる類おそろしと思ハれし。
能く小心に鍛練せし医を選び彼に委すべし
家方。秘方。一子相傳乃薬などいふて己のみ知る

薬のごとくに用のめうし。人によりて分量若干あり。かゝる
にも医者の歯牙にかくべき事にあらねバ常此を
を知らざるゆへ出家と恕べし。愚人の是に惑を
ける事なり。才智ある人ハ欺かれまじきとおもふに。
是を憑む徒がかゝれバとかく多かれ。是非なく
正しく明かなる家に隠す事なし。かくす家ハ
正しからざれバ明らかならざるゆへなり。聖賢ハ只よく
常をまもるにて。隠れたるを求め怪しき事を行る
事絶てなし。医師ハ病悩を救の術にして。秘密
まゝ秘業にあらねど奇方妙方ハ我よりなるべし

きく人あらば。たゞます〳〵教へいさゝか隠すまじきなり。
商賣家のいやしき欲心に似て人多く知る時ハ。
己が利徒すくなきにより秘して人に傳へず。
其欲心にくむべし
夢想は茶夢想の灸其外さま〴〵のいやしきそら
ごとをいひ。世を迷り人をたばかり。金銭をむさぼる
者数をあらバ。かゝる業にたづさはらしむ僻に
あさましく。まさに医の術に熟し聖賢の言を
学び。名醫の書物多く見年月を積て寝食
を忘れ。心を碎きれバとめても。遂に骨髄の場を

暁り得ることかたし。然るを一時発熱の中に是を洞徹(とうてつ)するを得らんや。人より人に伝へしこそ正道なれ。然得らん人ハつきまとふべし

今の医者ハ加減(かげん)くといふて其主剤(しゆざい)をきむし加(かゆ)るなり。又あしき薬医ハ昨日(きのふ)ハ大熱の附子(ぶし)を投じ今日(けふ)ハ大寒の石膏(せきかう)を用ふ。是的(まと)なくして虚空(こくう)に矢を射(い)るがごとし。心に違とするなれば是なより新に更(かへ)る改るものあり。病因(びやういん)いまだ決定(けつぢやう)する時ハ一二方にて始終まもるべし。或ハ一日数服する薬ハ調剤(てうさい)するとも。言聞(けんもん)ましく薬剤をあるべく頃と。病症を知らぬなれば。

又或人曰家に病ある時ハ風雨の日も厭(いと)はず日に二三度も来て診脈(しんみやく)し調剤もする医もあまたあり。丁寧を尽し深切にたるもの也。実ハ病因を探らずと。諂諛(てんゆ)の二つより是を奏(そう)するにあらずしていと騒(さう)ぐ故なり。

重病にハいろいろの変症あれども病因ハ只一ツなり。其一ツを治すれバ余症ハおのづから愈(いゆ)べし。儒門事親(じゆもんじしん)に急則(なすなはち)治其標(へう)。緩則治其本といふハ危急(ききう)なる病に論ありて古しへより高位の人にも五日に一度ぐらい診脈せしむると見えて扁鵲(へんじやく)が斉(せい)の桓侯(くわんこう)の疾(やまひ)ありけるを五日々々に一度診脈せしめるを

史記に載たり。さハいへど重病に到りてハ。病家をも
医者を神仏のごとく尊崇すれど。其情に對し日毎
に来て診脈し。薬を施す医もあるべし。まれハ深切
丁寧に心を尽すといへど多くハ病家を欺の術に
能し医の虚実を選び服薬すべき事なり
今医の薬壹貼の量七八分より。重きも四五分を限り
とせり。然るに此小貼を一日に貳貼三貼飲て薬効あら
んや。是まで愈る病ハ薬を飲ずと愈べし。飲ども
治するが薬毒の害なくして庸医の薬を捷する
より邂逅にまみえれど。賢者も小貼の薬効らず也

知りぬれど。近来ハ薬種の價むづかしきゆへ
大料に修合せず。故に良医ハ薬種を惜まずして
多く用ひど医ハ道に戻れるにあらし也。又病家
も貧しき人ハ是非もなし。並〱の人ハ者に
痛くもあれど病ひ愈て医の恩を忘るゝ者あり。
或ハ薬ハ大料小貼。病の軽重ハ差別もあれど。
壹貼て何分づゝの割にて。数程にをよぶもなし。
いかゞ医者の罪のごとくにいへども亦病家の罪とも云べし
薬ハつゝみ紙に方銘ならびに加減あらバ何を去何を
加へしと書付ある事なり。今医ハ同薬なれども

なきがゆゑ眼的のなきまゝより人の効を得むと。愧る心ありて方論をあらためんとこゝろみるあるにそ方銘加減をあつめれむ。返答まさしつゝ家方或は傳方なども。大奇方代用しに紛らして俗人嫗欺もあり。並し丸散湯剤とするべし。又薬種を角製として薬まゝより数日水に漬て薬能を失なふともかまはずして只見分をかざりとし寄麗にならべく刻み用ひ數あり。或は方剤に薬品の善悪を批判を云たゞそれ粉薬のごとくに刻むもあり皆庸医の所作と知べし。それとも湯薬の細なる處は薬味よく出る

薬力もつよしされど深淺を考へ刻む医者は稀なるべし今世の医者せんじやうなどのことしと書さこえがし医書にうときゆへ知ら煎煮法は方剤ごとに違ふるあり方法の規則なる傷寒論に委し。剉二三錢を姜小搾ぐ葛根湯は水一斗（その九合三勺一撮二九は当る後おなじ）入まず麻黄葛根を煎じ二升を減し沫をとりて諸薬を入煎じ三升をとれ用ふ。小柴胡湯は水一斗二升入煎じ六升を取滓をすてて再び煎じ三升をとれ用ふ。桂枝人参湯は水九升入まず四味を煎じ五升をとれ桂枝を入再び煎じ三升をとれ用ふ。

猪苓湯も水四升入。まづ四味を煎じ二升をとる。滓をすてゝ阿膠を入烊消し盡して温服す。大承気湯ハ水一斗入厚朴枳実を煎じ五升をとり滓をすて。大黄を入煎じ二升をとる滓を去。芒硝を入再び火にかけ一両沸して用ゆと載たり。是等を見て今医此等に拘むき法に遠へる事お乃記をおもひあるべし

小児養生傳

三都書林

京都二条通松原下ル町
勝村治右衛門

大坂心斎橋通安堂寺町
秋田屋太右衛門

江戸日本橋通壹丁目
須原屋茂兵衛